こんなんしてます。

わだいのしごと

101

農業が消える

ユズ収穫支援

ことしもユズの収穫に学生と共に行ってきました。行き先は古座川町平井。ことしは大豊作とのことで、70歳80歳を超えた生産者が黄色くたわわに実ったユズ山でうれしい悲鳴を上げている様子を思い、「これは早く行かなくちゃ」と学生19名を引率し、早朝の大学をマイクロバスで出発したのです。

ユズは10月半ばから11月半ばが収穫のシーズンで、この期を逃すと良い果汁が搾れないため1カ月の短期決戦となります。学生が行ける土日のタイミングは少なく、ことしは11月14日、15日。あいにくの雨でしたが、学生たちは長靴、カッパ姿でいざ！　高齢集落の収穫支援に燃えていましたが、実際は学ぶことの方がとても多い。そんなことを毎年実感します。

平井は、串本から国道371号線が古座川、さらに平井川に沿って北上し大塔山系南麓の山塊に消える、そんな山奥の地区です。住民の共同出資で設立したユズ加工販売の古座川ゆず平井の里は、6次産業化や最近では地域創生の取り組みモデルとして、和歌山県での地域活性化の代表例となっています。しかし、和大の実態調査では高齢化率86％（2012年）ともなりました。ゆず平井の里の頑張りの一方で、集落の高齢化の波はほぼ限界にきています。

和大のユズ収穫隊

農業・農村の敗北

2015年農林業センサスが発表されました。わが国の農林業・農山村の基本統計のことで、これによると農業就業者数は1985年から5年ごとに約20％ずつ減少。2015年の農業就業者人口は30年前の半数以下になりました。右肩下がりの就業人口に比べ、右肩上がりなのは就業者の平均年齢。今回調査では66・3歳。一方、耕作放棄地面積も過去最大を記録しました。

高齢化、担い手難のためにやむなく耕作放棄に至ることはつらい選択ですが、農地保全が政策として掲げられる一方で、圃場整備され美しく広大な現役の農地が、突如として住宅用地に売りに出されるのも現実です。なんとかならんものか、もったいないなあ、といった近隣の農家女性の顔が忘れられません。

「消費される農村」という視点が農村社会学の分野に登場して久しくなります。田舎暮らしやグリーンツーリズムなど都会の人が農村空間を「消費」するという考え方です。高度経済成長期には農村から多くの若者が都会に出て行きましたが、これを資本主義に農村の若者が消費された、とする論説もあります。「消費」には、再生産されてこなかったという分析があります。そしてついに、農地までもが商品として売りに出されているのが現実です。

農地の保有には農業を営むことが「約束」だったのではないでしょうか。内部から瓦解し転げ落ちるような農業の放棄は、農業と農村の敗北と言わざるを得ません。いや、政治、英語で言えば「We」、私たちの敗北、です。

さて、和大のユズ収穫隊は雨の中で奮闘。農家の方と共に収穫を行いました。毎年希望者を募集しますがリピーターが多く、一度来たら「はまる」ようです。帰りのバスには住民の方が、持って帰ってくれとユズや手作りの木工品をどっさり持って駆け付けてくれました。その気持ちがとてもありがたい。

目立つことのない、華やかさもない、地味な学生活動ですが、彼らのうち何人かは、きっと来年も筆者と一緒にユズ山へと帰ってくるでしょう。

まだ敗北を認めない、諦めないユズ山に。それが学生をまたこの地へと惹きつける理由かもしれません。

プロフィル

湯崎真梨子（ゆざき　まりこ）
和歌山大学産学連携・研究支援センター　教授
専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。